基礎教育実習実践報告 (2)

― 小学校5年社会科 伝統的な工業を例として ―

初 澤 敏 生（地　理　学）

近年，多くの教員養成系大学・学部において模擬授業が授業の中に取り入れられている。しかし，模擬授業に関しては実践報告等が少なく，授業担当者の技量に任されている部分が大きい。本小論は筆者が行った模擬授業の実践報告と，そこで指摘されたいくつかの問題点をまとめたものである。

〔キーワード〕模擬授業　教育実習　伝統的な工業　実践報告

1．は じ め に

近年，多くの教員養成系大学・学部で様々な模擬授業の実践が行われている。模擬授業は大学生を小中学校の生徒等に見立て，教育実習等において行われる授業実習を模擬的に行うもので，教員を志す学生の資質向上に大きな役割を果たすと期待されている。しかし，これはあくまで「模擬的な」授業実践にすぎず，これを学生の資質向上と結び付けるためには様々なタイプの実践を蓄積し，研究を深める必要がある。

模擬授業の実践に関しては，これまでに模擬授業の実践の経験からその問題点を整理してまとめた外山[1]，模擬授業の実践をまとめた永山ほか[2]，臼井ほか[3]，模擬授業を作成するまでの経過をまとめた初澤[4] などによる報告があるが，その蓄積はきわめて薄いと言わざるを得ない。特に模擬授業の実践を教員の資質向上と結び付けるにあたっての様々な工夫の蓄積や問題点の解決などについては，授業担当者の個人的技量に任されているというのが実状である。しかし，それでは成功・失敗を含めた様々な経験が蓄積されず，教員養成の資的向上を進めることも困難である。

本報告は，筆者が1994年度に福島大学教育学部社会系3年生を対象に行った模擬授業実践の記録である。授業実践自体は決して優れたものではないが，これを通して実践記録を蓄積するとともに，模擬授業実践上のいくつかの問題点を指摘することができると考える。

2．本実践の制度上の位置づけ

福島大学教育学部では1991年度より教育実習制度改革を行い，3年次において模擬授業を核とする1週間の学内実習を取り入れた。社会系においては2年次において「地域社会の総合研究」と言う授業を通年で履修する。ここでは，あらかじめ特定の地域を研究対象地域に設定し，学生は「地理班」「歴史班」「公民班」にわかれて様々な調査を行い，地域の状況を調査する。そして，そこで得られたデータを基にして，3年次の夏休みに教材研究・教材づくりを進め，9月に行われる学内学習において模擬授業を行う[5]。本実践においては，筆者は「地理班」を担当し，2年次の「地域社会の総合研究」の授業では福島県川俣町の織物業の調査を行った。そして3年次の模擬授業の実施にあたっては小学校5年社会科の「伝統的な技術を生かした工業」の単元において川俣織物業を事例として取り上げると仮定し，模擬授業を作成した。なお，この模擬授業の作成にあたっては7名の学生が参加した。これらの学生は全員2年次において川俣織物業の調査に参加している。

3．模擬授業作成にあたっての留意点

現行学習指導要領においては，伝統産業の学習内容について，小学校5年社会科の内容（2）において「我が国の工業生産の現状に触れ，工業に従事している人々が生産を高める工夫をしていることを理解できるようにするとともに，国民生活を支える工業生産の意味について考えることができるようにする」，そしてそのイ）において「我が国の伝統的な技術を生かした工業について，それが盛んな地域や生産物を地図や資料などで調べて，原料や土地の条件，技術などを生かして生産していることを理解するとともに，伝統的な技術を生かした工業製品の持つ意味について考える」と定めている。

すなわち，この単元においては事例として取り上げる産業の学習を通して，児童がそれの現状を知り，それが原料や土地の条件，技術などを生かして生産が行われていること，生産を高めるために様々な工夫が行われていること，そうして生産された製品が我々の生活を豊かにしていることを理解することが目標となる。これを本実践に引き付けて考えれば，その目標は以下のように整理できる。

① 川俣織物業の現状を知る。

② 川俣織物業が地域の原料と技術を生かして生産を進めていることを理解する。
③ 川俣織物業の生産を高めるために，それに携わっている人々が様々な工夫や努力をしていることを理解する。
④ 川俣で生産された織物が我々の生活を豊かにしていることを理解する。

以上4点の目的を実現するため，模擬授業の作成にあたっては，次頁の授業案に示したような小単元の目標および指導計画を設定した。ここでは川俣織物の生産工程に注目し，織物がどのようにして生産されるのか，その中で働く人々がどのような努力や工夫をしているのかを理解し，それを通して川俣織物業の現状と未来を考える力を養うことを目標としている。しかし，授業を作成していく課程でいくつかの問題が発生した。その中で最も重要なことは，授業を行う学生自身の織物業に対する理解が不足していたことである。

本実践に参加した学生たちは1年間川俣織物業の調査に参加し，見学と聞き取り調査を行ってきた。しかし，そのような経験を積んだ学生でさえ，具体的に織物がどのように作成されているのか，そこで働く人々はどのような工夫をしているのか，等について十分に理解していなかった。これは学生自身の問題意識が薄かったこともあるが，基本的に地理学や歴史学などにおいて行われる地域調査と授業実践のために行われる地域調査とでは調査項目等が大きく異なり，一方の調査結果をそのまま他方に適用することができないためである。そのため，本実践においても学生たちは授業実践用の補充調査を行い，教材開発を行った。

学生たちのこの様な経験は，その教材観を大きく変化させた。学生たちは議論を通して「子どもたちに働く人々の工夫や努力を理解させようとしても，子どもたちはどのようにして人々が働いているのかを知らないのではないか」「子どもたちがまず織物とはどのようなものなのか，それがどのようにして作られているのかを知らなければ，たとえ工場に見学に行っても何もわからないのではないか」と考えるようになった。学生たちはこの様な問題を解決するため，見学準備の授業において模擬活動を取り入れることによって，織物業とそこで働く人々に関する子どもの理解を深め，見学をより実りあるものにすることができると考え，次頁の授業案を作成した。

ここでは手機の模型を作成し，それで児童が織物を作成することを通して織物の構造を知り，働く人々の工夫や努力を理解するための基礎を養うことを中心的な課題としている。以下においては，模擬授業の実践記録を示し，実践内容を検討することにしたい。

4．模擬授業の記録

以下の授業記録は，模擬授業を記録したビデオを基に教師役の学生と生徒役の学生の発言をできるだけ正確に採録したものである。Tは教師役の学生の発言，Cは児童役の学生の発言を示す。

T：前の時間までに繭から絹の糸ができるまでを勉強しました。今日は糸から絹織物の布ができるまでを勉強したいと思います。

（布を見せながら）これが絹織物の布です。もう一つみなさんに見せるものがあります。

（ガーゼを見せながら）これは皆さんがけがをしたときに使うガーゼです。なぜガーゼを出したかというと，ガーゼは絹織物と同じようにして作ってあります。

どういう風に織っているのかというと，（ガーゼをほぐしながら）ガーゼをほぐしていくと，一本一本の糸になってしまいます。このことから，ガーゼは何本もの糸からできていることがわかると思います。

さっき先生は絹織物とガーゼは同じようにできていると言いました。絹織物も実は一本一本の糸からできているのです。（今度は絹織物をほぐしながら）ほら，こっちも一本一本にほぐれます。絹織物が糸からできているということをよく覚えておいてください。

今日は絹織物の布がどのようにできているかを考えたいと思います。

（板書：今日のめあて　絹織物はどのようにできているのだろう）

T：今日のめあては「絹織物はどのようにできているのだろう」です。

これから各班に，絹織物とガーゼとむしめがねをくばります。このむしめがねを使って各班で観察してほしいことがあります。

（絹織物等を各班に配布）

T：まず，ガーゼをさっき先生がしたようにほどいたり，むしめがねで観察したりして，布がどのようにしてできているのか調べてください。だいたい3分くらいで調べてください。

（ここまで7分21秒）

（3分経過）

T：それでは各班ごとに気づいたことを発表してください。

C：網目がいっぱいありました。

（板書：ガーゼを観察して　あみめ）

T：網目がたくさんあった。はい，次の班。

C：経ての糸と横の糸が交互になっている。

T：はい。

（板書：たての糸と横の糸）

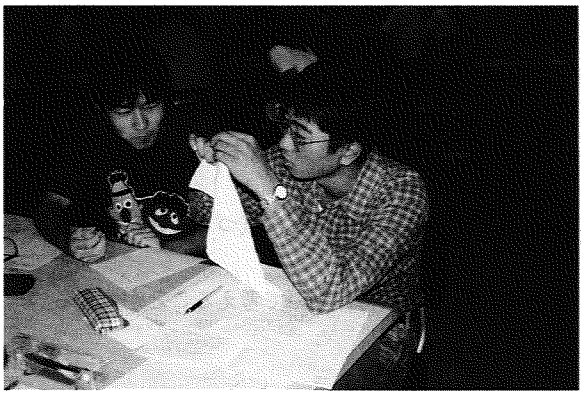
学生が作成した指授業案

第５学年　社会科授業案

１．小単元名：伝統的な技術を生かした工業（川俣の絹織物を事例に）
２．小単元の目標
(1) 伝統的な技術をいかした工業について，それが盛んな地域や生産物について興味を持ち，地図や資料で調べることができる。
(2) 身近な工業製品を通して，原料や土地の条件，技術を生かして生産していることに気づくことができる。
(3) 見学や体験を通して，働く人々の努力や，それに携わる人々のことを認識する。
(4) これまでの歴史，そして現状を知ることによってこれからの川俣の絹織物について考えることができる。
３．指導計画（総時数８時間）
第１次　川俣町と絹織物（絹市を通して）　１時間
第２次　絹織物の生産工程について（繭から羽二重まで）　２時間
第３次　絹織物工場の見学　２時間
第４次　絹織物工場の見学のまとめ　１時間
第５次　羽二重のゆくえ（羽二重から製品まで）　１時間
第６次　これからの川俣の絹織物業　１時間
４．本　　時（第２次第２時間）のねらい
絹織物の生産工程を通して，そこに携わる人々の働く姿を知る。実際に手機で布を織ってみることが絹織物の構造について理解し，それとともに絹織物ができるまでの様々な苦労について認識することができるようにする。
５．過　　程

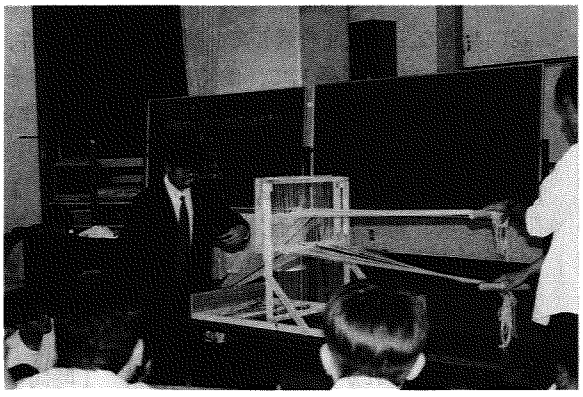
学習内容および活動	時　間	指導上の留意点
(1) 川俣町の絹織物を示しその上で構造がにているガーゼを取り出し，ほどいていく。	５分 導入	教師が絹織物を提示する。その後でガーゼをほどき，布が糸からできていることを示す。
(2) 糸がどのような構造で組み合わされて布ができあがるのかを考える。 ※ガーゼを観察する。 ※教師が見本を示し，それにならって数人の子どもが手機で織ってみる。 ※手機の糸を通す作業を実際に行う。	30分 展開	子どもがむしめがねを使って観察したり，ほどいたりすることによって，布の構造をとらえるようにする。 手機で実際に布を織ることによって絹織物ができるまでを理解できるようにする。
(3) 絹織物工場においては絹織物はどのように作られているのかを考える。 ※絹織物工場の製糸から布までの作業行程にふれる。	10分 発展	手機で織る前の準備作業に関わることによって手機で織るには多くの手間と時間がかかることに気づくことができるようにする。 手で織ることの苦労を感じたことから現在の工場での機械化に気づくことができるようにする。 写真パネルを使用することによって手機と工場の機械の違いを理解することができるようにする。次時の工場見学への意欲をかきたてる。

T：経ての糸と横の糸。はい，じゃあ，次の班。
C：編み目が粗い。



織物を観察する児童役の学生

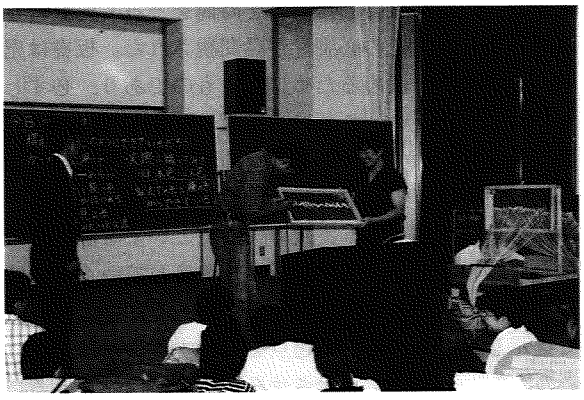
T：はい，さっきの班にプラスして，網目が粗い。
（板書：あみめがあらい）
T：はい，次の班。
C：経ての糸はほつれていないけれども，横の糸の方はほつれている。
T：（板書しながら）経ての糸はほつれてないんだけれども，横の糸の方はほつれている。はい。次の班。
C：向こうが透けてみえる。
T：はい。
（板書：向こうがすけて見える）
T：次の班。
C：網戸みたいに糸が交差しています。
T：ああ，網戸に似ていた。
（板書：あみ戸みたいに交差）
T：今，みんなに意見を出してもらって，網目がある，網目が粗い，経ての糸と横の糸がある，そして経ての糸はほつれているけれども横の糸はほつれていない，向こうがすけて見える，網戸みたいに交差している，という意見が出ました。
　今，ガーゼを観察してこのような意見が出たのですが，先ほど先生は絹織物も同じようにしてできているといいました。
　それでは，絹織物はどのようにして作られているのでしょうか。糸を組み合わせればできるんじゃないかな。A君どう思う。
C：どうやって作るのかわかんない。
T：そうだね。これだけじゃわからないね。
　じゃあ，みんなで織ってみようか。実は先生と仲間たちが布を作る道具を作ってみました。
（織機を見せる）
T：この道具を使うと，糸は違うのですが，同じように布を織ることができます。じゃあみんな集まってくれるかな。
（ここまで18分34秒）
（児童を織機の周りに集める）
T：じゃあ，織ってみます。（操作しながら）まず，この間に糸を通します。そして上にあった糸を下に移して，今度はこっち側から糸をぐるっとして，また糸を上に上げます。そしてまた同じように糸を通します。わかったかな。
　それではみんなにもやってもらいます。
（先生が指示をしながら生徒が織る）



模擬活動の様子

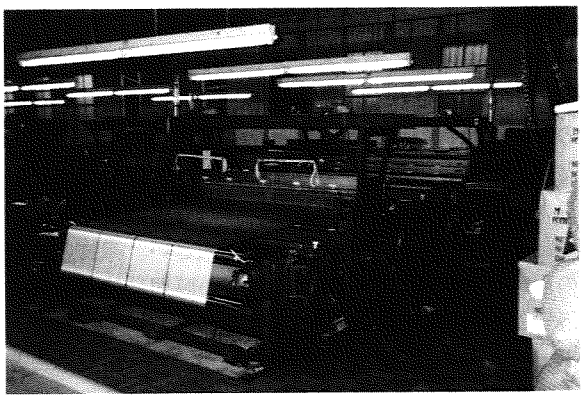
T：はい，さっきBさんが気づいたんだけど，布の色模様に注意するとどうなっている？
（今回の授業を行うにあたっては，生徒の理解を助けるために経糸と横糸の色を変えてある。横糸は紺，経糸は白と水色の糸を交互に設置した。）
（作業を続行）
（板書：実際に織ってみて）
T：それでは，みんな気がついたことを何でもいいから発表してください。
C：3種類の糸が織ってある。
T：何色？
C：白と水色と紺。
（板書：白・水色・こん色）
T：色違いにしたのは，糸が上と下に行くとき交互になるからです。それでは白と水色の糸を「薄い色」，紺の糸を「濃い色」としたら，「薄い色」と「濃い色」ではどのようになっているでしょうか。
C：経てと横の色が違う。経てが「薄い色」で，横が「濃い色」。
T：そうだね。さっきガーゼの観察で言ったことでもあるんだけど，これを見ると布が経ての糸と横の糸でできていることがよくわかるね。
（板書：たての糸と横の糸からできている）
T：この二つの活動からわかったことは，布は経ての糸と横の糸からできているということだね。
（ここまで34分06秒）
T：でも，この道具を使うためには，最初から糸が通っていたわけではありません。（模型の部品の糸を通しながら）この部分に糸を通したりすることもしなければなりません。布を織るためには，その前にい

ろいろな準備が必要です。みなさんにそのこともちょっとやってもらいましょう。
（織機の糸通し部分を示しながら）
T：それではここに糸を通してもらいましょう。C君，Dさん，やってみてください。
（C君とDさんが前に出る）
T：それでは，先生が一分間時間を計っていますから，それでどれぐらいできるかやってみてください。
（C君とDさんが作業を行う）



模擬活動の様子

T：はい，どれぐらいできたかな。今，C君とDさんにやってもらったんだけど，6本入りました。じゃあ感想を聞いてみようか。C君，どうですか。
C：糸が柔らかかったんでなかなか入りませんでした。
T：では見ていた人，どうでした？
C：たいへんそうでした。
T：そうだね，たいへんだね。でもそういう準備をしないと布は織れないんだよ。
　はい，それではみんな席に戻ってください。では黒板をノートに取ってください。
（ここまで41分18秒）
T：それでは，この次の社会科の時間は工場見学に行きます。工場ではどのようにして織物を織っているのかを見てきてください。
　工場ではこれと同じようなもので織っているのかな？
C：もっと早い。
T：そうだね。どうやって作っているのかを見学に行っても，いきなり見てもわからないだろうから，先生が写真を用意したのでちょっと見てください。
（写真を黒板にはる。）
T：今，みんなが道具を使ってやっていたのはこれなんです。（織機の写真をはる）こういう布を織る機械のことを「織機」といいます。
（板書：織機）
T：工場では織機という機械を使っているので，さっきみんながやったようなことをとっても早くできます。でも工場でもすぐに織機で織ることはできません。準備をするための機械なんかも必要なんです。見



模擬授業時に提示した織物工場の織機の写真

学に行ったらそのようなところも見てきてください。
（以上，47分51秒）

以上，模擬授業の実践記録を示したが，この中にはいくつかの実践上の問題点がある。以下においてはこれらを検討し，模擬授業実践をより効果的にするためのヒントを捉えたい。

5．模擬授業実践の問題点

本実践の後，参加者から様々な批判が出された。それは大きく授業設定上の問題と授業技術上の問題に区分される。まず授業設定上の問題から検討することにしたい。

ここで指摘された問題点の最大のものは，「模擬活動」を行ってもそれは実際の工場でのものとは大きく異なり，働く人々の理解につながらないのではないか，この体験を社会認識につなげることができないのではないか，との指摘である。本実践に限らず，模擬活動はあくまで「ごっこ遊び」の延長であり，それを行なうだけでは働く人々の理解にはつながらない。これを人間理解につなげるためには，様々な工夫が必要である。本実践においては，この模擬活動を織物がどのようにしてできるのかを理解し，働く人々の工夫や努力を捉えられるようにするための基礎作業と位置づけた。しかし，手機での作業体験がなぜ現代の工場で働く人々の理解につながるのかを明確にすることには失敗した。これをとりあげるためには昔の製造方法と現在のものとの違いを捉えた上で，そのような技術革新を生み出し，導入してきた人々の努力と苦労などを考慮し，現在の生産構造やそこで働く人々の姿などと結び付けなければならない。本実践ではそのような手順を踏まないまま性急にこれを展開したため，模擬活動と働く人々の姿がまったく分離してしまった。大きな反省点である。

また，この点と関連して，授業内容を機械の構造と仕事の大変さを知ることにしぼるべきで，働く人の姿に気づかせるのはこの次の段階ではないか，また，見

学の事前指導であるならば，子どもたちが見学の視点・関心を明確にできるようにすることが必要であるとの指摘がなされた。最初の設定において，この授業の目的を織物の理解と工場見学に行くための事前学習とを兼ねると位置づけてしまったため，授業の内容が過大なものになってしまった。これも単元の指導計画の詰めが甘かったことによる所が大きい。織物の構造の理解は指導計画の中で，より早い時間に位置づけて行うことも可能であったと考えられる。

一方，織布以外の部門の工程について目を配ることの必要性も指摘された。子供たちが工場に見学に行ったら，当然，織布以外の工程も目にすることになる。しかし，本授業では織布工程ばかりを学習し，それ以外の工程をまったく学習していない。見学準備の授業としては他の工程にも目を配り，製造工程全体を通して捉えることが必要であった。

これらのような失敗の原因は，手機作業を中心に位置づけてしまったことである。このことが結果として，この内容をこの時間に引き付け，授業内容を肥大化させることにつながった。これらの指摘の通り内容を精選してそれを指導計画上に位置づけることが必要であった。

また，授業設定上の課題として，小単元の目標と授業計画とが必ずしも一致していないことも指摘された。小単元の目標は学習指導要領の内容に沿って作られているが，具体的な授業展開の中で，どの部分がどれに相当するのか，また，すべてが体系的に位置づけられているのかなどの検討がなされていない。ただ学習指導要領を引き写すだけの小単元目標では意味がない。この点は深く検討すべきであった。

この原因の一つとして，時間の関係で，小単元を通しての指導案の作成を行わなかったことが指摘できる。単元計画は立てているものの，その中で模擬授業を行うのは1時間だけであり，通常，学生たちはその1時間のみの構成を考え，授業を作成する。しかし，そうすると，えてして教師自身がこの単元を通して子供たちに何を捉えさせようとしているのかが不明確になり，結果的にその時間の目標も不明確なものになりやすい。本実践の場合も，特に見学以降の時間の具体的な授業内容，そこで使用する資料等の検討を行わなかったことが，授業内容が目標から乖離することにつながった。模擬授業を行うにあたっては，少なくとも小単元全体の授業案を作成することが必要である。反省を込めて指摘しておきたい。

次に，授業技術上の問題点を検討することにしたい。最も重要な問題は，教師の説明が多く，生徒が気づく場面が少なかったということである。これは教師役の学生たち授業実践に不慣れであるためであるが，これに加えて，模擬授業に特有な問題点も含んでいる。通常の授業が流れの中で行われるのに対し，模擬授業は1時間のみの授業をある流れの中で行うということが前提となる。そのため，単元の指導計画の中で最初に位置づけられる授業を行う場合以外は授業の冒頭部で詳細な説明を入れなければ児童役の学生たちは流れを理解することができない。外山の実践報告においてはあらかじめ授業案等を児童役の学生たちに配布・説明し，全員が単元と授業の構造を理解した後に模擬授業を行うことの有効性が指摘されている。この様な配慮をすることが必要である。

また，教師が板書した内容を時間をとって児童に写させたことも，その必要性が疑問視された。板書は児童の授業理解を深めるために行うものであり，必ずしも写す必要はない。これは「黒板は写すもの」という固定観念が教師の側にあったためである。児童の立場に立った授業方法をより深く検討する必要がある。

これらの問題点は本実践の失敗点といえるが，この様な経験の蓄積を通し模擬授業を改良していくことは教員志望学生の資質向上に不可欠であると考え，あえて提示した。これらの問題点を改善することにより，この授業計画を質的に向上させることができると考える。

6．お　わ　り　に

以上，筆者が1994年度に行った模擬授業実践の概要を報告した。この検討から得られた結論は以下の通りである。

① 地域教材の開発にあたっては，あらかじめ授業のねらいを明確にした上で調査を行う必要がある。それに関する詳細な調査があっても，授業のねらいとずれていては使用することはできない。

② 働く人々の苦労や工夫を理解するためには，産業の具体的な工程についてある程度の知識を持たなければならないが，実際には子どもたちがそのような知識を持っていることは期待できない。

③ これを補うためには模擬活動が有効であるが，単元計画をしっかり立て，その位置づけを計画化しなければ，模擬活動を児童の社会認識に育成に結び付けることはできない。

④ 単元計画を立てるにあたっては，授業の流れを明確化するために実践する時間以外の授業案も作成する等の工夫が必要である。それによって実践する授業の目的や位置づけをより明確にすることができる。

⑤ 模擬授業は実際の授業のようにある流れの中で実践されないため，どうしても教師の説明が長いものになる。これを補うため，あらかじめ授業参加者全員が単元計画と授業案に関して説明を受け，理解しておく等の工夫が必要である。

⑥ どのようにしたら児童がより授業を理解できるようになるのかを考え，授業の立場に立った授業方法・技術を身につける必要がある。

注

1）外山英昭（1998）：教材づくりと模擬授業－「社会科教材研究」における試み－　教科教育学研究第６章　pp. 17～34

2）永山昭三ほか（1991）：「社会科教育法」と模擬授業　教科教育学研究　第９集　pp. 43～62

3）臼井嘉一ほか（1991）：模擬授業の実際と運営に関する研究　福島大学教育実践研究紀要　第19号　pp. 51～60

4）初澤敏生（1993）：基礎教育実習実践報告　－小学校３年社会科　身近な地域の工業の模擬授業－　福島大学教育実践研究紀要　第23号　pp. 95～102

5）福島大学教育学部社会系では，1995年度より再度制度改革が行われた。これにより２年次生を対象として行われていた「地域社会の総合研究」の授業が廃止される一方，３年次前期に基礎教育実習と結び付けた「地域の教材化」の授業が新設された。